
記憶

しちみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶

【Nコード】
N3573T

【作者名】
しちみ

【あらすじ】
歩いていたら記憶が消えちゃった。ここはどこ？

記憶がない！！

私は道を歩いていた、のだと思う。何のために歩いていたのか、理由がわからない。わからなくなってふと立ち止まった瞬間、私は私の内部の異変に気づいた。

なぜ私が外出したのかはもちろんのこと自分が何者だったのかすらわからなかった。思い出そうとしても、思い出すことができない。穴のあいたヘラで金魚すくいをしているようで、記憶を取り出すことができない。

何か自分のことがわかるもの。鞆の中、財布の中、全部探してみた。あった。財布の中に私のと思われる美容室のカードが入っていた。

川越夕希

それが私の名前。

名前をみてもピンとこなかった。他に探す手がかりもない。

とりあえず、家に帰ったほうがいいと思った。

なぜか家に帰る方法はわかっていた。覚えていたものを全部失ったわけではないみたい。そもそも何も覚えていなかったらカードの文字を読むことすらできなかったはず。たぶん、何らかの影響で部分

的な記憶喪失になったのかもしれない。テレビで見たことがある。そのときの説明している教授らしい人がものすごい髪型で笑っていたっけ。

・・・なんでこんなことは覚えているのかしら？

とにかく、親に事情を説明すれば、何とかなるだろう。そう信じ私は家路を急いだ。

しかし、私の期待は外れた。頭を最大限に働かせて拾いだした、残留記憶をたどってついた先は大きなマンションだった。そう、私はマンション暮らしだったのだ。自分が一人暮らしをしていたなんて思ってもみなかった。財布の中に入れていた鍵を取り出して鍵穴にさしてみる。

がちやつ。

鍵は穴に収まり、何の不自由もなく回すことができた。現実なんだ。

やっぱり、私は一人暮らしだったんだ！

私は夢にもない現実の出来事に興奮していた。自分が一人暮らしをしていたなんて夢にも思わなかった。中はどうなっているのかな？ 知的で大人の女性みたいな雰囲気を出した部屋なのかな？

気がついたら、好奇心が私の心の扉をぶち破って部屋のドアを開けていた。

部屋の中は綺麗に整理整頓されていて、逆に気持ち悪かった。うまく言い表せないけど、客観的に自分をみて怖いと思ってしまった。壁に鏡がかけられてあった。自分の姿を見たいと思った。私の好奇心は底なしだ。

鏡には小柄で華奢な身体を持った女の子が映し出されていた。首にかかるかからないかの長さで黒く艶びかりする髪。それが私の着ているゴスロリっぽい白のブラウスと対照的でまさに女の子って感じがする姿だった。

うまく言い表せていない…。

机の上には私が使っていたと思われるノートや教科書が置いてあった。数学A・B、日本史、世界史…。私は高校生だったみたい。ぱらぱらとページをめくってみる。ノートはやけに機能的にまとめられていた。色ペンなどもたくさん使われていてカラフルに仕上がっているけど、それは機能的な美の一部に過ぎなかった。

ピンポン

呼び鈴が鳴った。誰かしら？玄関に向かい、ドアを開ける。

ドアの向こうにいたのは50代くらいのおばちゃんだった。誰？予想外な出来事に内心驚いている。

不思議なのは相手の方も私を見て驚いてることだ。私に会いに来たのなら、驚くはずがない。

「あら……。もしかして、夕希ちゃん？」

「は、はい。そうです。……。あの」

どちらさまですか？聞こうとは思った。でも、もし知り合いだったら。そう思うと怖くて聞けなかった。

「あらやだ夕希ちゃんこんなにかわいくお化粧しちゃって！もう、おばちゃんの若い頃にそっくりだわ。あっ！これからどこかお出かけに行くのかしら？」

・・・本当に誰だろう？

「いえ、もう出かけたところです。」

「あらそうだったの。でね、今日夕希ちゃんに会いに来たのは、家賃のお話よ。夕希ちゃん、まだ振り込んでいないでしょ？ 今月の家賃を振り込んで欲しいのよ。本当はおばちゃんが直接もらえばいいんだけど、でも…、」

それから延々と長話をされた。このアパートもボロくなって新築にしようか悩んでるだの、でもそうしたら家賃がお高くなってしまうだの、果てには最近ゴミの分別がひどいと私に愚痴を漏らしてきた。私はちゃんとゴミを出している。そこだけは記憶にある。

あのおばちゃんは大家さんだった。長話をされて最悪だった。

だけど、そのおかげで一つ思い出したことがあった。鞆の中にお金が入った封筒がある。6万4千円、今月の家賃。私が外に出たのはついでに家賃を振り込みに行くためだった。なぜかって？ あの大大家さんは家賃を払っていない人にわざと長話をするから。

でも、何で外に出たのだろう、カメラなんか持ち歩いて。何かの写真を撮りに行く予定だったのかな？

写真？ あっ…

思い出したときにはもうパソコンに向かっていた。そこで一つのブログを見つける。

そのブログにはどこかの景色やそれをバックにして映っている私が納められた写真が写っている。私のブログ。どこか景色のいい場所

に行っては写真を撮ってブログに載せていた。今日も写真を撮るために歩いていたんだ。

思い出す作業が一通り終わったところで左手にバインダーを持っていることに気づいた。回覧版だ。さっき大家さんに渡された。町内会のボランティアだっけ、お隣さんに回してって言われた。

私の部屋ははじっこなので、隣の部屋はひとつしかない。隣の部屋のインターホンを鳴らす。

でも、出てこない。

もう一度鳴らしてみる。

やはり、反応はなかった。

改めて行こうかな？部屋に戻ろうとしたときにがちやがちやと鍵を開ける音が聞こえた。

出てきたのは清楚な雰囲気醸し出す女性だった。私よりも年上で栗色の長い髪の毛が柔らかい香りを出しているようだった。大人の雰囲気だった。

「・・・あの、どちら様ですか？」

そのお姉さんは私を見てきょとんとしている。じーっと見られて少し恥ずかしい。

「あの、回覧板です。」

気まずさからそう言ってそそくさと回覧板を渡そうとした。

「あれ、お隣さんだったの?」

その反応に私は固まってしまった。

「お隣ってメガネの男の子じゃなかった? いつから変わったの?」

私は今までどんな人付き合いをしていたのだろう・・・。

私の思っていることが顔に出てしまったのか、相手は親切に答えた。

「気を悪くした? ごめんなさいね。私、近所づきあいが悪いからお隣のことにについて全然わからなくなるのよ。それに、前のアパートの時は勧誘がしつこかったからついつい警戒しがちになっちゃって。回覧板ね? わざわざありがとう。」

まだ私が身構えていたせいか、回覧板には手が届かなかったのちよっと身を乗り出した。そのときだった。

「きゃっ!?!」

バランスを崩してこちらに倒れ込んだ。

「ふえっ!?!」

避けようとした。でも遅かった。正面からぶつかった。

倒れ込む中、私の唇は彼女の唇に触れていた。柔らかい感触。甘い

匂い。

その全てを感じる前に後頭部から衝撃が伝わり、私の記憶はそこで終わっていた。

気がつくところは見慣れた天井が広がっていた。私の部屋だ。

「大丈夫？」

さっきのお姉さんが視界に映る。気がついたことだけど、私は布団の中にいた。お姉さんが介抱してくれたのだろう。

「だ、大丈夫です。介抱してくれてありがとうございます。」

「い、いいわよ、そのくらい。」

親切な人だった。でも、向こうはまだ、何か言いたげ。

「その、その…。」

お姉さんは言葉に迷っていた。よく見ると顔もだいぶ赤い。もじもじしながらお姉さんは言葉を絞り出した。

「その格好、似合ってるわよ。」

「えっ？」

言葉の意味がわからなかった。いや、意味はわかるけど意図がわからなかった。

とにかく、私はもう大丈夫なので部屋に戻ってもらった。

不思議な日だった。記憶を失ってしまった上によくわからないことばかり。

今日はもう寝よう。考えても何にも戻ってこない。

翌朝。今日は月曜日なので登校だ。

高校はアパートから二駅のところにある。鞆の中の時間割表から私は3年生だということがわかつている。

タンスの中を見て困ったことがある。制服がなかった。おそらく私服校なのだろう。

でも、制服が着たかった。学校といったら制服！かわいいブレザーをなので、白のワイシャツに赤い蝶ネクタイをあしらいい、下には赤に黒のチェックが入ったスカートで登校することにした。

登校した。よかった、私服校だった。

教室に入ると、周りの視線が目につく。なぜだかわからない。でも、視点は私に集中していた。程なくして先生が来た。先生も私のことをじっと見つめている。見ているメンツにも特徴がある。見ているのは

男子だ。

・・・

いや、もっと性格に描写しよう。クラスの全員が私のことを見ている。そしてそれはみんな男子だった。教室には男子しかいなかった。

完全に記憶を取り戻した。そう、ここは男子校なんだ。私、いや僕

はこの生徒だ。女装中に記憶を失ったんだ。

「まあ、川越のことは気にせんで、出席とるぞ。」

そんな先生の声が聞こえる頃には私は席に座ったまま気絶していた。

また記憶喪失になるのかな？ いや、それはないだろう。

こんなもの、忘れようにも忘れられない。

「ううん…。」

気絶した後に見た最初の風景は保健室の天井だった。

「大丈夫？」

昨日聞いた声が脳内をリフレインする。あのお姉さんにまた介抱されたんだ…。

えっ？

がばっと飛び起きると、目の前にはあのお姉さんが病院でよくある丸椅子に腰掛けてこちらを見ていた。白いワイシャツに茶色のロングスカート。その上から桃色のエプロンをつけていた。

「あっ、あんまり急に体を動かすと…。」

「っ痛！」

わき腹に痺れが走った。

「どうしてわた…、僕が女装しているってわかったのですか？」

「昨日介抱したときに他にケガがないかどうか服を、脱がせたの。ケガもそれほどひどくなさそうだし、このまま病院に連れてってでも恥ずかしい思いをするだけだから夕紀君には自宅療養させたの。君が目をさめたときに聞こうかと思ったんだけど、なかなかストレー

トに聞けなくて…。」

沈黙が保健室を包んだ。でも、僕はこれだけは質問しなければなら
ない。

「あの。僕、これからどうすれば？」

「そのままでもいいと思うよ。」

「えっ？」

あまりも投げっぱなしな答えに思わず反応してしまった。その反応
を見て、お姉さんはニコニコと笑う。

「だって、夕紀ちゃんかわいいからすぐクラスになじめると思うよ。
それに私も話し相手が男子生徒しかいないから少しくんざりしてい
たのよ。」

「えええっ!？」

こうして僕は川越夕紀という名の女の子として暮らすようになった。
もう僕に普通の男の子としての人生はないのだろうか？

(後書き)

というわけで診断メーカー企画第2弾でした。
ここまでお読みくださいましたありがとうございます。
では、またの機会に♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3573t/>

記憶

2011年10月9日02時54分発行